お　わ　り　に

ここ数年で「自己肯定感」という言葉が広く知られるようになりました。自己肯定感とは、自己価値に関する感覚で、自分が自分についてどう考え、どう感じているかによって決まる感覚です。人と比べて優れているかどうかで自分を評価するのではなく、そのままの自分を認める感覚であり、「自分は大切な存在だ」「自分はかけがえのない存在だ」と思える心の状態が土台となっています。

今の日本の若者が、自分自身をどう捉えているかについて、自己肯定感、意欲、心の状態などの観点から調査し、その分析結果が紹介されています。内閣府が実施した調査結果では、自己肯定感の観点では、「自分自身に満足しているか？」の質問に対して、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した者は、日本以外の 6 か国は 70～80％だったのに対して、日本は 45.8％で最も低い結果でした。日本は諸外国の平均を下回り、日本の若者は、諸外国と比べて、自己を肯定的に捉えている者の割合が低く、自分に誇りを持てていないという結果が出ています。そして、日本の子どもや若者の自己肯定感は、年齢が上がるにつれて低くなり、平和で豊かな日本にいながら、多くの不安を抱えながら、自信がなく将来への希望を持てずに、つまらない、やる気が出ないと感じている若者の割合が増えています。

学校においても、自己肯定感が感じられなかったり、集団と上手に関れなかったりする子どもが増え、大人になることに希望を抱けず、自分の将来に夢や希望を持てずに生活している姿も多く見られるようになったと思います。今後、自己肯定感の育成することが求められているのではないでしょうか。「人の役に立った」「人から感謝された」「人から認められた」という経験こそが、子どもたちの社会性を育てていく上でとても大切な感情であり、それが将来大きな自信につながるのではないかと思います。

こうした状況を受けて、本年度も子どもたちから寄せられた「常南のヒーロー（ヒロイン）」箱への投函（3 年間で 1,800 通）された内容を「ダリマナ」通信に紹介し、「友だちの良いところを素直にすばらしいと認めよう」「常南小を素敵な学校にしよう」という子どもたちの気持ちを大切にしてきました。その結果、周りの人が気付かなくても、誰かのために動きたいという心が子どもたちの中に育ってきているように思います。この 3 年間で、全校児童の友だちの良さを認める目と感性が育ってきたことはとてもうれしいことです。2 年後には開校以来最高の 190 名を超す児童数を有する学校になっていく中で、主役の児童も確実に成長していることがわかります。これからも、日々の教育活動を通して、常南小を「ありがとう」（感謝）でいっぱいにし、自己肯定感を高めていってほしいと思います。

最後になりましたが、本校の学校経営に対して、ご支援、ご協力いただいた保護者の方々をはじめ、お世話になった多くの方々に厚く感謝して刊行の言葉といたします。

令和 2 年 3 月 31 日

岡崎市立常磐南小学校　太田　一弘